

新型コロナウイルスワクチン

■予防接種証明書(ワクチンパスポート)について

ワクチンを接種した人を対象に、新型コロナウイルス感染症予防接種証明書の発行・交付を開始しました。当面の間は、海外渡航で活用する場合に限り、発行が可能となります。発行・交付の申請には旅券の写しなどの書類が必要です。詳しくは市ホームページで。

市HP ページ番号 223701



■申請方法

健康推進課に郵送(〒730-8586住所不要)で。健康推進課か区地域支えあい課の窓口も可

■交付までにかかる日数

申請受け付け後、5営業日(区地域支えあい課受け付け分は7営業日)以内に交付

※多数の申請が集中したり、申請書に不備があった場合などは、交付までにさらに時間がかかることがあります
※同感染症の拡大を防止するため、できるだけ郵送で申請してください

■ワクチンを無駄にしないために

一部の集団接種会場で急なキャンセルが発生した場合、市公式LINEアカウントを活用して、希望者へキャンセル情報を通知する取り組みを開始しました。同アカウントの登録方法・キャンセル情報の受信設定方法は市ホームページでご確認ください。

市HP ページ番号 236686



■県内で広域接種が始まりました

ワクチンの接種は、やむを得ない事情がある場合を除き、住民票のある自治体で受ける必要がありますが、県内の他市町にある医療機関でも接種を受けることができるようになりました。各市町で接種の予約方法や広域接種の開始時期が異なる場合があるため、あらかじめご確認ください。詳しくは市ホームページで。

市HP ページ番号 236327



広島県新型コロナウイルスワクチン接種コールセンター(☎513-2847)

東京2020パラリンピック正式競技の一つ

ボッチャをご存じですか

パラリンピック正式競技の一つ、ボッチャ。ボッチャのルールや魅力を紹介します。

障害福祉課(☎504-2147、☎504-2256)

健常者でも障害者でも楽しめるスポーツ

ボッチャは、重度脳性麻痺者か同程度の四肢重度機能障害者が参加できるスポーツとしてヨーロッパで考案され、現在ではパラリンピック正式競技になっています。障害の有無に関係なく誰もが参加できるため、近年では障害者と健常者をつなぐスポーツとして注目されてい

ます。この競技は地上で行われるカーリングともいわれ、ルールも似ています。ジャックと呼ばれる白いボールを床に投げ、赤か青の持ち球6球を、投げたり転がしたり、他のボールに当てたりして、ジャックにいかに近づけるかを競います。ボッチャの魅力をもっと知りたい人は、心身障害者福祉センターへお問い合わせください。

同センター(☎261-2333、☎261-7789)

インタビュー interview

ボッチャを知って楽しんで



ボッチャ日本代表選手 古満渉さん (35・中区在住)

ボッチャの魅力は障害者スポーツという枠にとらわれることなく、子どもからお年寄りまで、みんなが気軽に楽しめることです。ジャックボールを目掛けて手持ちのボールを思いどおりに投げることができたときの楽しさ、戦略を考える面白さ、チームが協力して勝ったときのうれしさをぜひ体験してほしいですね。

私は、筋力が徐々に衰えていく脊髄性筋萎縮症という障害があり、電動車

東京2020パラリンピック 8月24日(火)～9月5日(日)

いすで日常生活を送っています。そのような状況の中でボッチャに出会い、競技者となって約9年、このたび東京パラリンピックに日本代表として出場することになりました。

大会では、ご支援いただいた皆さんや応援して下さる皆さんと想いを一つに、メダル獲得を目指して頑張りたいと思いますので、ご声援よろしくお願ひします。



英知を結集し、未来を担う若者と共に核兵器廃絶へ不断の歩みを



8月6日に行われた平和記念式典で、松井市長が世界へ向けて平和宣言を行いました。全文を紹介します。
岡平和推進課(☎242-7831、☎242-7452)

平和宣言

76年前の今日、我が故郷は、一発の原子爆弾によって一瞬で焦土と化し、罪のない多くの人々に惨たらしい死をもたらしただけでなく、辛うじて生き延びた人々も、放射線障害や健康不安、さらには生活苦など、その生涯に渡って心身に深い傷を残しました。被爆後に女の子を生んだ被爆者は、「原爆の恐ろしさが分かってくると、その影響を思い、我が身よりも子どもへの思いがいっぱいで、悩み、心の苦しみにへと変わっていく。娘の将来のことを考えると、一層苦しみが増し、夜も眠れない日が続いた。」と語ります。

「こんな思いは他の誰にもさせてはならない」、これは思い出したくもない辛く悲惨な体験をした被爆者が、放射線を浴びた自身の身体(からだ)の今後や子どもの将来のことを考えざるを得ず、不安や葛藤、苦悩から逃れられなくなった挙句に発した願いの言葉です。被爆者は、自らの体験を語り、核兵器の恐ろしさや非人道性を伝えるとともに、他人を思いやる気持ちを持って、平和への願いを発信してきました。こうした被爆者の願いや行動が、75年という歳月を経て、ついに国際社会を動かし、今年1月22日、核兵器禁止条約の発効という形で結実しました。これからは、各国為政者がこの条約を支持し、それに基づき、核の脅威のない持続可能な社会の実現を目指すべきではないでしょうか。

今、新型コロナウイルスが世界中に蔓延し、人類への脅威となっており、世界各国は、それを早期に終息させる方向で一致し、対策を講じています。その世界各国が、戦争に勝利するために開発され、人類に凄惨な結末をもたらす脅威となってしまった核兵器を、一致協力して廃絶できないはずはありません。持続可能な社会の実現のためには、人々を無差別に殺害する核兵器との共存はあり得ず、完全なる撤廃に向けて人類の英知を結集する必要があります。

核兵器廃絶の道のりは決して平坦ではありませんが、被爆者の願いを引き継いだ若者が行動し始めていることは未来に向けた希望の光です。あの日、地獄を見たと言ふ被爆者は、「たとえ小さなことからでも、一人一人が平和のためにできることを行い、かけがえのない平和を守り続けてもらいたい。」と、未来を担う若者に願いを託します。これからの若い人をお願いしたいことは、身の回りの大切な人が豊かで健やかな人生を送るためには、核兵器はあってはならないという信念を持ち、それをしっかりと発信し続けることです。

若い人を中心とするこうした行動は、必ずや各国の為政者に核抑止政策の

転換を決意させるための原動力になることを忘れてはいけません。被爆から3年後の広島を訪れ、復興を目指す市民を勇気づけたヘレン・ケラーさんは、「一人ではできないことは多くないが、皆一緒にやれば多くのことを成し遂げられる。」という言葉で、個々の力の結集が、世界を動かす原動力となり得ることを示しています。為政者を選ぶ側の市民社会に平和を享受するための共通の価値観が生まれ、人間の暴力性を象徴する核兵器はいらないという声が市民社会の総意となれば、核のない世界に向けての歩みは確実なものになっていきます。被爆地広島は、引き続き、被爆の実相を「守り」、国境を越えて「広め」、次世代に「伝える」ための活動を不断に行い、世界の165か国・地域の8,000を超える平和首長会議の加盟都市と共に、世界中で平和への思いを共有するための文化、「平和文化」を振興し、為政者の政策転換を促す環境づくりを進めていきます。

核軍縮議論の停滞により、核兵器を巡る世界情勢が混迷の様相を呈する中で、各国の為政者に強く求めたいことがあります。それは、他国を脅すのではなく思いやり、長期的な友好関係を作り上げることが、自国の利益につながるという人類の経験を理解し、核により相手を威嚇し、自分を守る発想から、対話を通じた信頼関係をもとに安全を保障し合う発想へと転換することです。そのためにも、被爆地を訪れ、被爆の実相を深く理解していただいた上で、核兵器不拡散条約に義務づけられた核軍縮を誠実に履行するとともに、核兵器禁止条約を有効に機能させるための議論に加わっていただきたい。

日本政府には、被爆者の思いを誠実に受け止めて、一刻も早く核兵器禁止条約の締約国となるとともに、これから開催される第1回締約国会議に参加し、各国の信頼回復と核兵器に頼らない安全保障への道筋を描ける環境を生み出すなど、核保有国と非核保有国の橋渡し役をしっかりと果たしていただきたい。また、平均年齢が84歳近くとなった被爆者を始め、心身に悪影響を及ぼす放射線により、生活面で様々な苦しみを抱える多くの人々の苦悩に寄り添い、黒い雨体験者を早急に救済するとともに、被爆者支援策の更なる充実を強く求めます。

本日、被爆76周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と手を取り合い、共に力を尽くすことを誓います。

令和3(2021)年8月6日
広島市長 松井 一實